1. 小学校・中学校：High SES – 90%, Middle Class – 10 %

　私は小学校と中学校は私立インターナショナルスクールの小中高一貫校に通っていました。当校が対象としていた客層は、日本でビジネスを展開していたりする海外、主にアメリカ人の家庭でしたので、生徒は高所得者層の家庭からくることが前提でした。稀に中流階級の家庭で少し親が無理して学校に通わせているという子もいましたが、このような背景の子は周りの人間の豪奢についていけずに大抵身内でかたまり、それぞれの出身階層ごとに生徒の集団が形成されていました。ここの大抵の生徒はお金による制約を味わったことのない人ばかりであり、常に最新の機器を持ち、小学校の時点で大人でも手の届かないような高級ブランド服を平時着用しているといった有様でした。また、多くの子は富裕な外人コミュニティに住んでいたため、学校でも地元のコミュニティでも並外れた驕奢に慣れており、金銭感覚は平均的な中間層とは甚だしい違いでした。中間層の出であり、貧しい地域に住んでいた私にとっては、地元の貧困なコミュニティと学校の裕福な空間の差異が著しく、学校の人間はマジョリティーにとっての現実から遊離したハイパーリアルな空間に生きているようでした。ある個人のSESによってその人の価値基準が定まり、人間関係が規定され、同水準のSESの人間と集団を作ることで幾つもの階層とその間の離隔が確立されていく過程をミニチュアスケールで観察できる学校でした。

高校：High SES – 20%, Middle Class – 40%, Low SES – 40%

　私の高校は私立でしたが学費も非常に安く、公立高校や他の私立校に入れなかった人の受け皿のような立ち位置にあったので、多様な階層の人間がいました。貧困家庭から来て家計を支えるために真剣にパートタイムで働いていた人もいれば、お金に恵まれて贅沢な暮らしをしている人もいました。また、学校の校則が厳しく、生徒の行動、格好等が均一化されていたため、出身階層による違いを意識することが少なく、生徒もそのSESに関係なく交流していました。

1. 高校に通う生徒の経済的地位は多様でしたが、高校自体の社会経済的地位は低く、教育内容や学校の制度もSESの低い人に合わせたものになっていました。生徒間の経済格差を隠すために制服や持ち物に関する詳細な規則が定められており、学校帰りの買い食いや遊びも厳禁でした。また、貧しい家庭の生徒のアルバイトを支援する体制も整っておりましたが、バイト先は可能な限り学校から遠く、他の生徒の目の触れないところにするのを推奨していました。勉強面ではそもそもレベルが低かったのでそれほど教育に注力していませんでしたが、塾に通わなくともいいように補習授業を受けられる制度を、おそらく塾に通うことができない人を意識して設けていました。

　卒業後の進路も多様であり、大学進学せずに就職する人も多数いました。そのため、学校がハローワークと連絡をとり、就職を支援するようなシステムも存在しました。また、進学する人の中でも大半が専門学校や短大、あるいは名の知れてない最小規模の大学に行くので、そのような機関への指定校推薦が多くありました。一般で大学受験をする生徒の数は全体の一割にも満たず、ほとんどが推薦で進学先を決めていくので、指定校推薦枠が多く、推薦入試の支援が大変手厚かったのも学校の一つの特徴でした。逆に言うと、一般入試の支援はほとんどなく、受験に向かって切磋琢磨して取り組むといった雰囲気も全くありませんでした。知名度の高い、世間的にみて高学歴な大学に行くということはほんの一握りの推薦枠で行く以外はありえなかったため、それを志す人もいなく、むしろ受験をしようと意気込むと疎まれるような空気が学校を包んでいました。

1. 私は、私の高校が受験勉強に全く意欲的でなかったからこそ勉強を続けて結果的には早稲田大学に合格することが出来たのだと考えています。授業は基本的に最もレベルの低い人間に合わせた内容になっていたので、全く骨がなく、物足りなかったです。踏み込んだ内容の学習をしたければ、自分で調べてやる必要がありました。そのため、早期から自ら主体的に勉強に取り組み、物事を調べ、考え、より深く学習する術が身につきました。これは、今までどう動いて、何を学べばいいのかを学校に spoon fed されてきた人には得難い技術だと思っています。また、先生陣の能力不足というのも重大な問題としてありました。先生たちは自分の教科についての理解が足りておらず、情報を誤って教えたり、生徒の質問に全く答えられないといったことも少なくありませんでした。先生たちの言動が矛盾を含んでいることも頻繁にありました。そのため、権威により裏付けられた事柄を鵜呑みにするのではなく、何事も慎重に、批判的に検証する習慣が身につきました。これは、学問を営む上で必要な知的態度であり、同時に日本の教育では教えられていないものだと解しています。前回の授業で配布された刈谷剛彦の『教育の世紀：大衆教育社会の源流』からの抜粋で指摘されていた通り、主体というものは、それが属する社会のメタルールへの服従の関係の中で初めて意識され、築かれるものであります。その意味では、制約が多く、制度の中に欠陥を多く含んでいる学校での生活と、その学校空間内で運用されるシステム合理性との私の格闘は、私の主体性を養い、批判的思考能力を育てる契機となりました。これらの高校での経験が、最終的に早稲田大学に合格できるレベルの学習能力、思考能力となったのです。